



相手の徳分を見出そう

5月大教会教会長会議

立教182年5月22日

大教会長 片山幹太



発行所 〒763-0223 香川県丸亀市本島町泊268
天理教本島大教会
 電話 0877-27-3321 (代)

本島通信編集室 R.190526-0528-17
 奈良県天理市指柳町270-1
 本島詰所 〒632-0093
 電話 0743-63-1571 (呼)

Email: news@honjima.com
 発行部数: 897部 (先月比±0)

大教会 朝夕おつとめ時間
 [6月1日~8月31日]
 朝づとめ 午前6時00分
 タづとめ 午後7時00分

まず連絡事項です。

三代真柱様の五年祭が6月24日午前10時より教会本部で執り行われます。都合の合う方皆さんと大勢で参拝させて頂きたいと思えます。

また、昨日の役員会で相談した結果、この年祭に際し、各教会一律に御供を運ばせて頂きたいと思えます。よろしくお願ひいたします。

さて、天理教婦人会は来年初立110周年を迎え、記念総会に向かって非常時の活動になっております。ご婦人の徳分を充分に發揮され、役割の上にお勤め頂きたいと思えます。

話は変わりますが、緑茶も紅茶も同じお茶の葉から作られます。発酵させる製法の違いで緑茶になったり、紅茶になったりするそうです。

緑茶は沸騰したお湯を少し冷ましてから入れると一番良い味が出ると聞かせて頂きます。

三代真柱 中山善衛様 五年祭
 期日・6月24日午前10時
 於・教会本部

一方の紅茶は、沸騰したお湯をさらに30秒ほど沸かせて、非常に熱くしたお湯を注ぐと美味しい紅茶の味がでるのだそうです。

私たちが、それぞれ神様からちょうど良いものを与えてもらっているように思えます。建築に例えれば、ちょうど良い柱になるように、または床板になったり、天井板になったりと、それぞれにとって一番良いところを考えてお育て頂いているように思えます。婦人會でも、こういうことを親神様は求めていらっしゃるのか、よく思索をする機会になっているのではないかと思います。

今年の婦人會総会では、内統領の宮森与一郎先生が祝辞を下さいました。

ちょっと想像してみてください。皆さんは今、運動会にきています。皆さんのお子さんの運動会です。こうして見渡してみますと、お孫さんか

もしませんが、とにかく、お子さんか、お孫さんか、ひ孫さんの運動会です。今、徒競走が始まりました。皆さんのお子さんは、一番ピリを走っています。皆さんは懸命に応援しましたが、お子さんは同級生に大きく引き離されて、最後にやっとの思いでゴールしました。そして、皆さんの元にやってきました。

この時、皆さんは何と声をかけるでしょうか。ちょっと想像してみてください。「せっかく応援してやったのに」と責めるでしょうか。「なぜピリになったのか」と問いたいですでしょうか。「恥ずかしい、私の子ではない」と言って無視するでしょうか。

たぶん、そんなことはしないのであります。きつと、「最後までよく頑張った」と言うはずですよ。もし、悲しそうにしていたら、優しく抱いてやるでしょう。泣いていたら、黙って背中をさすってやるのではないのでしょうか。

この優しさこそが、親の心であります。

そして、人の心養うように、優しいなあと言ううは世界の台明治33年5月16日

とのおさしづを引用されました。
私たちも優しい言葉を心がけて、勤めさせて頂きたいと思えます。

最後に、ある絵本をご紹介します。
「ひび割れ壺」という、インドで伝わるお話なのですが、ここで出てくる「完璧な壺」「ひび割れ壺」そして「水汲み人足」を、それぞれ自分に置き換えて聞いて頂けたらと思います。

「ひび割れ壺」

インドのある水汲み人足は2つの壺を持っていました。天秤棒てんひんぼうの端にそれぞれの壺をさげ、首の後ろで天秤棒を左右にかけて、彼は水を運びます。その壺の一つにはひびが入っています。もう一つの完璧な壺が、小川からご主人様の家まで一滴の水もこぼさないのに、ひび割れ壺は人足が水をいっぱいに入れてくれても、ご主人様の家に着くころには半分になっ

ています。いつも自分を誇りに思っていました。なぜなら、彼が作られたその本来の目的をいつも達成することができたから。
ひび割れ壺はいつも自分を恥じていました。なぜなら、彼が作られた

その本来の目的を、彼は半分しか達成することができなかったから。
2年が過ぎ、すっかり惨めになっ

ていたひび割れ壺は、ある日、川のほとりで水汲み人足に話しかけました。
「私は自分が恥ずかしい。そして、あなたにすまないと思っている。」

「なぜそんなふうにいるの?」
水汲み人足はたずねました。

「何を恥じているの?」

「この2年間、私はこのひびのせいで、あなたのご主人の家まで水を半分しか運べなかった。水がもれてしまっから、あなたがどんなに努力をしても、その努力に報われることがない。私はそれがつらいんだ。」
壺はいいました。

水汲み人足は、ひび割れ壺を気の毒に思い、そして言いました。「これからご主人様の家に帰る途中、道端に咲いているきれいな花をみてごらん。」

天秤棒にぶらさげられて丘を登っていくとき、ひび割れ壺はお日様に照らされ美しく咲き誇る道端の花に気がつきました。

花は本当に美しく、壺はちよつと元気になった気がしましたが、ご主人

人様の家に着くころには、また水を半分漏らしてしまつた自分を恥じて、水汲み人足に謝りました。

すると彼は言ったのです。

「道端の花に気づいたかい? 花が君の側にしか咲いていないのに気づいたかい? 僕は君から落ちる水に気づいて、君が通る側に花の種をまいたんだ。そして、君は毎日、僕が小川から帰る途中水をまいてくれた。この2年間、僕はご主人様の食卓に花を欠かしたことがない。君があるがままの君じゃなかったら、ご主人様はこの美しさで家を飾ることができなかつたんだよ。」

(作者不詳、菅原裕子訳)

皆それぞれ神様のお働きを頂いて、この世に生まれてきます。得意なこと、不得意なこと、いろいろあると思えます。つい自分の判断で、皆こうあるべきだ、あああるべきだと考えてしまいがちです。

物語の壺に例えると、どの壺もご主人さま、または親神様に置き換えても良いかもしれません。親神様に喜んでもらえる心を皆持っていると思つています。

それを見出してあげるのが、私たち

教会長夫妻の大きな役割の一つではないかと思えます。

つい、こうあるべきだからと、できないことを叱ってしまいがちになりま

す。その前にじつと一回考え直して、その子の徳分を見つけ出し、陽気ぐらしのために必ず必要であることを信じて、その徳分の花が咲き実が実るように、丹精させて頂くことが大事だと思ひました。

「いよいよ」こともおちばがえり」が近づいております。

今日は、学生層育成者講習会のお話も聞かせて頂きました。

将来を担う若い人たちを育てることはもちろん大切なことですが、また同時に信者さん方、その子弟、その周囲の人たち、まだお道を知らない人達にも、必ず陽気ぐらし建設に向かつて、人のためになるものを持っていると思ひます。それらを見つけ出し、引っ張り出して、磨いてあげて、その人が必要とされるように導くことが大事です。どうか人材育成の夏に向かつて、お互いに心して掛かっていききたいと思ひます。

ありがとうございました。

(文責・本島通信編集室)

「誠の心で

人材の育成に努めよう」

本部学生担当委員 なかやましようえつ
中山昭悦先生

本日は本島大教会5月月次祭に際し、学生層育成者講習会を開講くださり誠にありがとうございます。

本島大教会長様は学生担当委員会の前委員でいらつしやいます。その会長様をはじめ皆様の前で、釈迦に説法のようなことになると思いますが、精一杯勤めさせて頂きますので、よろしくお願いたします。



信仰の喜びを自ら実践しよう

学生担当委員会では縦の伝道を主眼に置いて、学生層に信仰の喜びを伝えることを目的に活動しております。

これには親や育成者が、信仰の喜びを自ら^{みずか}身体や行いで表現して見せてあげることが、何よりも学生の心に伝わると思ひます。

「こんな結構な神様はない」と親が日々子供に見せてやることによって、子供が前向きに信仰を捉えてくれるきっかけになると思ひのです。

嗜好品の話で恐縮ですが、たとえばウイスキーは初めて飲んだとき、美味しく感じないという研究結果があるそうです。

しかし大人になって、飲む回数を増

やして、経験値が上がっていくと、次第にバラのような香りがするとか、バナナのような魅力的な味と感ずるようになるのだそうです。

これを後天的な味覚(アクワイアド・テイスト)と呼ぶそうです。

信仰も、最初から楽しいこと、楽しいこと、好きなことばかりがあるわけではありません。一見取っつき難い局面を越えて行くことにより、新たな魅力が見えてくるということは、皆様も経験があるのではないと思ひます。

例えば、人生の逆境のような場面に遭遇しても、親や育成者が、それに喜びを見出し、神様にすがることができれば、子供達も信仰への信頼感が生まれ、難しいときに神様に頼ってみよう、すがってみようという心が芽生えるのではないかと思ひのです。

そして親に倣って信仰の真似事をしてみる。しかし上手くいかず挫折する。そこで再び親が「結構やな、ありがたいな」と言っている姿を見て、また信仰の真似事をしてみる。しかし上手くいかない。こんなことを何度も繰り返しているうちに、本物の信仰心が心の中に培われていくのではないかと思ひます。

誠の心で人材の育成に努めよう

学生担当委員会では、活動方針を「誠の心で人材の育成に努めよう」と定めて活動させて頂いております。

稿本天理教教祖伝に怠け者を感化されるお話があります。

ある秋の収穫時に、作男を雇われたが、この男は、丈夫な身体にも拘らず、至って惰惰^{なま}者で、他の人がどのようにに忙しくしていても、一向に働こうとはせず、除^のけ者になつていった。しかし、教祖は見捨てることなく、いつも

「御苦労さん。」

と、優しい言葉をかけて根気よく導かれた。作男は、初めのうちはそれをよい事にして、尚も、怠け続けたが、やがて、これでは申訳ないと気付いて働き出し、後には人一倍の働き手となった。

(『稿本天理教教祖伝第三章生い立ち』より)とあります。

事実、この方は近隣でも有名な怠け者であり、その悪名が拡がって、中山家以外では雇って欲しくないところがあったそうです。

この様が可哀相だと思われた教祖は、

この怠け者を小作人として雇われました。ここで働けなかったら他で働くところが無い、という状態でありました。

しかしせっかく雇っても怠け続けるこの男に、お屋敷の他の小作人が次第に噂をするようになります。恩知らずなやつだ。あるいはその矛先は教祖にも向かい、「新造様も恩をかけすぎではないのか。」と囁かれるようになります。

すると次第にこの怠け者は、皆の輪の中から除け者になっていったのであります。

私が想像するのでは、この怠け者は心に何かを抱えていて、働けない状態だったのではないかと考えます。

教祖はこの怠け者に「苦勞さん」と声をかけられ、そして周囲の小作人たちには「今少し長い目で見てやっておくれ。この男にも見どころがあるんだから」と声をかけられたのだと思うのです。

この時代の社会情勢を考えると、お米を巡って一揆が起こるほどの時代です。事実、この時代に大坂では大塩平八郎の乱が起こっていて、厳しい年貢の取り立てに追われ、今のような陽気な秋の刈り入れではなく、庄屋としての責任もあり、米一粒たりとも取りこ

ばすな、という重圧の中でのお話でありました。

伝えられる話によると、教祖は小作人さんたちに広く心を配られ、仕事でもご自身は人の2倍も3倍も精を出される中、仕事の合間には「お前さんのところ子供は元気なのか」と気にかけて「おっかさんは元気なのか」と気にかけてたり、休憩時間にはお茶やお菓子を振る舞われることもあり、何とにもこや

かな繁忙期だったと伝わっております。この温かな心に触れ、何とにもこやかな表情の中に、何度も「苦勞さん」と声を掛けて頂くうちに、この怠け者は働いてみたいという心が芽生えたのではないのでしょうか。

そして少しお手伝いすると、教祖はすぐに発見されて、お礼を言われ、こんなんでお礼を言ってもらえるなら、もうちょつとやってみようか。わあ助かるわ。こういうことを繰り返されるうちに感化されて、人一倍の働き者になっていったと想像します。

人の話を聞くのはテクニックではない

また、米泥棒のお話を拝読させて頂きます。

ある時、米倉を破って米を運び出

そうとする者があつた。男衆達はこれを見付けて取り押さえ、訴えようと、騒いでいたが、ふと目を醒まされた教祖は、人々をなだめて、

「貧に迫つての事であろう。その心が可愛想や。」

と、かえって労りの言葉を掛けた上、米を与えてこれを容された。

(『稿本天理教祖伝巻一 童生い立ち』より)

このお話は教祖が火の元、家事の後始末をなされてお部屋にお戻りなつたとき、庭先で騒いでいる者たちの気配を感じてお出ましになった時のことです。

3、4人の使用人が一人の男らしき人物を囲んでいます。その男はほっかむりをしています。側らには米が一俵落ちていました。米泥棒です。使用人は、このほっかむりを取って顔を見てやれ、となります。するとその正体に一同が驚くのです。

その泥棒は中山家が春の種まきと秋の刈り入れ時の繁忙期に雇う小作人だったのです。現代で申せば、仕事がないところではない季節パートのようなものです。ですからお屋敷の小作人達は、恩を仇で返しやがってと、裏切られたような気持ちだったでしょう。

う。

しかし教祖はこの泥棒を責めるどころか、まずその訳を訊かれます。

この男には父親と奥さんがいて、病気で長い間寝たきりだったそうです。さらに8歳を頭に子供が4人ある。そしてこの男は仕事がいともあるわけではない。その状況に、食べることに追い詰められて、悪いとは知りながら間取りの分かる中山家の米倉を破つたというのであります。

この事態をお聴きになった教祖は、お前がそんなことで苦しんでいたのに気がなくてごめんよ。この私を許しておくと、その場にあつた米一俵と、さらにお金を取ってこられて、これでお渡しになりました。

この温かいお心に触れて、男は申し訳ないことをしてもうた。今後はたとえどんなことがあつても、二度と悪事はないと心の中から決心がついたことと思います。

当時、米泥棒は死罪になることがあつた重罪でした。

私が特に感じ入るのは、自分の家に入りする小作人に裏切られても、教祖は深いお心でその訳を訊いておられることです。そして、お許しになるだ

けに留まらず、気付かない私を許しておくれ、というお気持ちになっておられることです。結果的に、この小作人家の命をお助けになりました。

以前、〈はっぴす〉の取材で専門家にインタビューをしたときの、非常に印象に残る言葉がありました。それは、『人の話を聞くことは、テクニクではありません。何よりも心を込めて聴くという態度、決心が大切です。特に自分にとって都合の悪いときはなおさらです。』

このお話を伺いながら、私は米泥棒の話が心に浮かんできました。

学生と話をするとき、この怠け者や米泥棒の逸話を心に置いて、教祖ならどうなさるだろうかと考えてみてはいかがでしょうか。何か問題を抱えていても、そこからおたすけにつながるのではないかと思います。

「明日の朝見とれ、我々には神さん」

私の祖父、中山慶一本部員が幼少期、信仰に目覚めた話があります。祖父が残した文章がありますので、お聞き頂きたいと思います。

私が中学1年生の時です。その年の

1月、大祭の翌27日のことでした。家ではその頃母も病の床に就いており、今日か、明日かと言われているのですが、その晩私は何か家の中の空気が一変したような只ならぬ気配を感じ取ったのです。やっぱり絶望なのか、と。私の悲しみは痛切なものがありません。ああいよいよ今夜であかんねんな、重苦しい追い詰められたような気持でした。酷い胃潰瘍の上に胆石を併発している母、胆石の発作は激烈でした。気になってそつと病室を覗いては、あまりの苦しみ様に怖くなって逃げ帰る。しかしまた覗く、そんな幼いことを繰り返す私の毎日でもありました。

祖母「よし」がその夜私を呼びに来ました。いよいよ臨終の枕辺に連れて行かれるんやろうな。私は覚悟をして後に従いました。でも私が導かれたのは病室ではなく、別の部屋です。祖母と向き合って座らされました。「お前はお母さんが今宵限りで死んでいくのがいいか、それともめつたに会えん遠方の土地でもこの世のどこかで生きてくれているのいいかどちらや」というのです。無論生きてくれているのいいに決まっている。私はそうぼんやりと答えます。「そうじゃろ

う。そうしたらな、お前のお母さんは私らとはしばらくお別れじゃ。遠いところに布教に行ってもらおう。教祖の御用を専一にやって頂くためにおたすけに行ってもらうんや、ええやろな」と祖母。

あつと私は心の中で叫びました。助かるんだ、きつと、それならというので、結構や、生きていてくれるなら、とそう答えたのです。

「そうか、得心できるんだつたらな、お医者はんは今晩限りや言うし、みんなそう思ってる。けれどもな、それは世間の話や。我々には神さんがあるんや。明日の朝見とれ、朝になったら分かるから。さあお前ら子供らはそんなにうろろろせんとよろしい。今夜はお休み。」

普段私が信頼して止まぬおばあさんの静かだが力強い言葉でした。

私はおばあさんを信じ切つて安心し、言葉通りにしました。ぐっすり眠ると翌朝早く目が覚めました。気になってたまりませんから顔も洗わず病室に一目散、部屋をのぞき込むときはさすがに恐る恐るでした。だが、そこでは母が寝床の上に座ってお粥を頂いている私の驚き、嬉しさ、何とも言えない

ものがありました。そこには想像もつかぬ劇的な変化、不思議な光景が見られました。苦痛にあえぎ、虫の息で今夜は臨終と言われた母が粥をすすっているのです。私はおばあさんの明日の朝見とれと言った言葉を思い出し、おばあさんの真実を通して神様のなさりようを今日の前に見せて頂いているのだと思いました。鮮烈この上ない印象でした。

後で知ったのですが、この劇的な事態の裏には私が当時知らないでいたことがあったのです。それを話してみましよう。

二代真柱様の御母堂様が今晚おもとさんはあかんねん、という事をお聞きになったのは1月27日でした。そしてその夜、夕づとめが終わつてから家へおいでになったのです。家には西の部下教会長さんや親戚の者とかが大勢病室に詰め掛けていました。父慶太郎はその頃西大教会、当時分教会の会長でした。人払いになり、病人の母と、私の父とおばあさんと3人で御母堂様のお仕込みを頂くことになりました。御母堂様は母の胆石のことも御承知下さっていました。

「あんな、出けたものならずとけるで。熱さえ与えたら鉄でも溶けるも

のやで。熱というたら温かい心や、人を助ける心や。まあ名称の一つくらいお許しただけるような働きをさせて頂くとういう心になれんかな」とそのような意外に簡単なお諭しだったらしいのです。

しかし母はこれで立ち直ったのです。信仰する者の一人として、母にも単独布教でもさせてもらったら良いんだろとかという思いはあったのです。ただ、小さい子供のことが気にかかるし、おばあさんに子供らの世話まで押し付けてはと考える迷いもあって、踏み切れなかったのです。それが御母堂様のお言葉一つで吹っ切れました。お言葉通りさえよいと確信できたわけです。

おばあさんはおばあさんで同じように明るい確信を抱きました。そして、病室の周りをうろうろしている私を可哀そうに思い、御母堂様がお帰りになつてから私に「明日の朝見とれ」と話してくれました。こうして翌朝の奇跡に向って時間は流れて行ったのです。

あれから長い年月が経ちました。その後私自身も大病で生死の淵を彷徨ったことがあります。そんな時です、もう絶体絶命という境地に立った私の心に何かパッとひらめくものがありました

た。そして、私の気持ちの置き所が変わるのです。それは一種の居直りとも言いたくないような心境の変化なのですが、その変化と共に強い力が私に湧いてくるのです。ガンでもうあかんのじゃと言われても、それは世間の話や。こちらには神様がいて下さる。神様が良しと言われることろまで力の限り突進しよう。そこまで思い定めるともう私には恐ろしいものもありませんでした。

そんな風に居直ることが出来た私の心の支えになったもの、それはいつもおばあさんが与えてくれた訓戒です。そして何よりも母の病に日夜心を痛めていた子供心に強く明るい灯をともしてくれたあの言葉だったのです。

「明日の朝見とれ、我々には神さんがある。」

『信仰とは感動』

このお話のあと、私が所属する本明實分教会が、初代会長夫人であるものと

の単独布教により誕生いたしました。数年前に、創立80周年記念祭を勤めさせて頂くとき、信仰の元一日に、その思いに返ろうと、皆さんにこのお話をしました。

その場に集まった一同深く感激いたしました。その感激を胸にそれぞれの部内教会や信者家庭に持ち帰り、それぞれの家がその家の信仰の元一日を掘り返し、誓いも新たに創立記念祭を迎えさせて頂きました。

胸に熱を帯びると結果も大きく変わってくるもので、いつもの月次祭の6倍の参拝者数であふれ、また記念祭に向かつて多くの方が準備をして下さいました。

「信仰とは感動」と言われる先生がいます。その家に伝わる信仰感動体験に思いをはせることは、大きな推進力を生むと思います。

そして信仰を子供に伝えるときも、自分の先祖が味わった感動体験を味合わせてあげるといふことも、大切な要素ではないかと思えます。

たすかつて頂くために信仰しているんだという自覚と、なぜ我が家がいま信仰しているのか、ということを見守りしておくことが、大切だと思います。

おまさ様の心の拠り所

教祖の長女であるおまさ様が、私にとつては信仰初代に当たります。おまささんについて出てくる話にお酒がい

つもつきまといまいます。初代真柱様は「酒のおばやん」と呼んでおられました。竹を割ったような男勝りな性格で、いろんな人をいじめたという話も残っています。

男勝りな一面は、弾みとはいえ巡査を叩いて連行されたりしましたが、教祖のお側で最後までついていた、教祖より長生きした唯一のお子さんであります。また、官憲の急な取締りに身を挺して、機転を利かせておふでさきを守られたこともありました。

このおまささんが、明治20年陰暦正月26日のおつとめるとき、当日は朝から教祖のお側に付いておられました。おつとめの十二下り目が始まったとき、ちよつとおつとめを拜んでくるからと、その場におられた山澤ひさ様に席を預けて立たれました。ほんの数分間の出来事だと思えます。その間に、教祖は現身をお隠しになりました。

それまで片時も離れず熱心にお側について勤めてきたおまささんとしては、悔やんでも悔やみきれなかったように、ひどく後悔され、「ああ、枕辺を離れんかったらよかった」とあちこちで言っておられたそうです。

ところがある日、おまささんの夢に教祖が出てこられました。

「おまさ、私厠わがわに行こうと思ったけど、草履がないで」と仰せられたそうです。そのことが、教祖が存命でお働き下さっている、何よりも有難い心の拠り所となったと伝え聞いております。

我が家の縦の伝道

教祖がご存命である最大の証しは、おさづけの理にあると思います。

先ほど申した祖父慶一がおさづけの理を頂戴して家に帰ってきたときの話です。いつも御用でいるはずのない父慶太郎が、家でニコニコしながら待っていたそうでありませう。

「お前、えらいええもん頂戴してきたな」「ええ？」と祖父。「お前今日おさづけの理拝戴してきたんやろ、えらい結構なもの頂戴してきたな」もう満面の笑顔で言うそうであります。そして次に待っていたのが「お前な、西の詰所で西のおっさんが風邪ひいてふうふう言うて寝てるから、行って早速におさづけ取り次いで来い」と言われ、断る訳にも参りません。西の詰所に行くだけは行こうと向かいました。

しかし道中では「こまったことになったな、西のおっさんと言えれば日頃尊敬して止まない大先輩やし、こんな

若造におさづけ取り次いでもらっても嬉しくないんとちゃうやろか」。そんな事を考えながら向かう道中は狼狽して記憶にないほどであったそうでありませう。

途中で一計が浮かびあがります。「お父さんに行けと言われたから来るだけ来たけど、迷惑やろうと思うから帰るで」と一方的にまくしたてて帰ってしまおうと思いついたのでした。

そして詰所でまくし立てて帰ろうとしたとき、「いやいやちよつと待ってくれ」手をつかまれました。「サラのおさづけはよう効くんや、早速にやってくれ」となりまして、祖父はしどろもどろになりながら、おさづけつてどうやって取り次ぐんやったかいなつていうぐらいの体で、大汗をかきながら緊張しながら取り次いだということがあります。

するとその場でスーッとおっさんの熱は下がったそうであります。そして祖父は汗をびっしょりかいたまま、冬の寒空を自宅まで歩いて帰り、風邪を引いて熱を出して寝込んだという話であります。

これが我が家の縦の伝道になりました。私の父も拝戴した当日、家で待っていた祖父が「お前、えらいええもん

頂戴してきたな」とニコニコしながら待っていて、交通事故で入院した方におさづけを初めて取り次がせてもらったそうです。

私の初めてのおさづけ取り次ぎ

その歴代の話を聞いておりましたから、私もその日に備えておりました。おさづけを拝戴して帰ってきましたら、父が詰所の玄関前で車のエンジンをかけて乗って待っており、母がブーツと出てきて私は拉致されるように、おつとめ着を剥ぎ取られ、服を着せられて、「えらいええもん」もニコニコも省略されたまま、車にボンと押し込まれまして、2時間かけて向かったのが兵庫県明石市の病院でした。

すでに日が暮れて、夜遅い時間になっていましたが、廊下の先から「殺してくれ」と叫ぶ声が聞こえてきます。

まさかこんなところに、と思いがながら連れて行かれた部屋が、その声の主の病室でした。

恰幅の良い男性が、ベッドの上に座って、天井から吊されているロープをつかみながら、「こんなに痛いんやったら殺してくれ」と絶叫していました。

指定難病である潰瘍性大腸炎の手術を受けられ、手術自体は成功したのですが、お腹を長く切っていて、恰幅が良いために傷口が塞がらない。その状態が長く続いて、傷口は繋がらないし、膿んでくるし、痛み止め薬の間隔も短くなって1〜2時間しか効かない状態になり、その薬が切れたタイミングに私たちがお邪魔したというわけです。

私はそのあまりに悲惨な光景に、足が完全にブルブルと震えだし、これは無理だと思っているところ、父が背後から前に私を押し出してきました。

鬼気迫る現場を私は生まれて初めてで、パニックになっているところ、父が要らんことを言うのです。包帯を取り替えていた看護師さんに「次の包帯をまだ巻かないで下さい」

傷口が露わになっていて、見ると野球の硬球ボールの縫い目のように縫われているのです。その間から、中身が噴き出すようにはみ出ていました。

それを見ると「もうあかん」と気を失いそうになったとき、父が「教祖が一緒に取り次いで下さるからだいじょうぶや」と言ってくれて、腹に胆力がよみがえってきました。

とにかく無我夢中でおさづけを始めました。

手を患部に当てたとき、熱を保って熱かったです。きっと膿み上がって熱かったのだらうと思います。

さらにその方は「殺してくれ」と私に叫んでいます。

私はどうしていいか分からず、「おやさま、おやさま」と叫びながら必死に取り次がせていただき、最後に二拍手をした後、初めてその男性と目が合いました。すると、さっきまで叫んでいたのが、大変穏やかな顔をされて私を見ていました。そして「楽にしてもらいました」と言ってくれたのです。

「おさづけ、つてすげー」と大感動で、私は教祖はご存命ということ強く感じました。

学生生徒修養会高校の部へ

さて、学生担当委員会では本年の活動方針の基本方針は「誠の心で人材の育成につとめよう」です。

そして重点活動項目として「学生生徒修養会、高校生の集い『まなびば』への参加を呼びかけよう」「別席をすすめ、ようばくへと導こう」と二つ掲げています。

三代真柱様は教会長について「駅伝のランナーに似ている」という話をさ

れたことがあります。自分の任せられた区間を精一杯走るといことだと思えますが、これも次の世代を担ってくれる人がいればこそであります。そのためには子供のときからおおむねに繋いで頂いて、親神様、教祖の息をかけて頂くことが、次の区間を走るランナーを発掘し育成していくことになると思います。

どうか親里で学ぶ機会を伝えて頂きたいと思います。

この夏も、学生生徒修養会高校の部が開催されます。

教祖の「この屋敷に帰ってくる者に、一人も喜ばさずには帰されん」というお言葉を胸に、精一杯おもてなしの心で準備を進めております。

どうか本年も学修の勧誘やお世話取りにお心を掛けて下さいますようお願い申し上げます。

ありがとうございます。

(文責・本島通信編集室)



教会長子弟「おちばの集い」

教会長子弟育成委員会(牧野道昭委員長)では、教会長子弟「おちばの集い」を5月25日午後1時より本島詰所修練室で開催し、教会長子弟40名とスタッフ15名の計55名が参加しました。

テーマは「共に道をつなぐ」。

当日はウォーミングアップの後、西山道教授員(本室分教会長)の講話。ビデオ上映に続き、山下裕佳さん(本水島)と鎌田康典さん(攝津)が感話を行いました。

続いて、ねりあいは「我が家の信仰の元一日」について。参加者は、事前に作成したシートを持参してねりあいに臨みました。中にはシートと共に親

からの手紙も添えて、共に道をつなぎたいとの深い親心を感じさせる参加者もいました。

それぞれの信仰の元一日について話し、親や祖父母が神様の不思議を頂いてたすけられた御守護話についても話し合いました。

最後は「大教会長様を囲んで」。挨拶に立った大教会長はまず、教えに触れる機会を持ち、教えを味わうことが大事であると述べられ、続いて稿本天理教祖伝の第1章「月日のやしろ」を全員で拝読。気付いたことや思ったことを参加者に問いかけられ、本教の元一日についてさらに理解を深めました。



五月月次祭 祭典役割

献饗長 寺本教生
伝 供 老木邦光・篠原丕王・岡崎八十則・岩橋竜造・向所隆文・永島宗行・原口実・後藤正治・奥村龍夫・伊東康成・吉田知彦・高島栄造・肥後章・大西剛・宮路和徳・倉嶋孝明・茶屋原良昭・鎌田典夫・渡部友見・
 加藤文男・村田輝夫・山下英久・山内忠・屋敷ゲリー・須崎晴道・柴田久生・時久英次・溝口晋太郎
雅楽奉仕者 文岡育則・高垣光治・雲庵春彦・横関茂治・片山直明・長尾海和・岩橋守行・鎌田康典(順不同)

祭主 指園方	大教会長 牧野道昭	扨者 井上哲 西山道教	賛者 永山清明 吉田晴雄	地 方	てをどり	てをどり 前平	てをどり 後半	てをどり 後半
片山勲 寺本教生 西山道教	大教会長 岩崎俊郎 片山肇 會長夫人 片山やすゑ 牧野ハル子	窪田靖明 岩橋竜造 雲庵春彦 村田輝夫 原口和子 梅木澄代 宮武有為子	永島宗行 伊東康成 高垣光治 屋敷ゲリー	片山勲 寺本教生 西山道教	大教会長 岩崎俊郎 片山肇 會長夫人 片山やすゑ 牧野ハル子	窪田靖明 岩橋竜造 雲庵春彦 村田輝夫 原口和子 梅木澄代 宮武有為子	永島宗行 伊東康成 高垣光治 屋敷ゲリー	永山清明 吉田晴雄
井上哲 菅岡繁幸 田中丸勝也 井上力	岩橋守行 奥村龍夫 後藤正治 吉田知彦 片山直明 雲庵まち子 篠原久子 吉田要子	宮路和徳 田中丸勝也 井上力 茶屋原良昭 須崎晴道 肥後章 片山美穂 上潟口節子 加藤道代	永山清明 吉田晴雄	中山昭悦先生 (学生層育成者講習会)	ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓 三味線 胡弓	ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓 三味線 胡弓	ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓 三味線 胡弓	ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓 三味線 胡弓

五月月次祭祭文

立教百八十二年五月二十二日

この神床にお鎮り下さいます親神天理王命の御前に天理教本島大教会長片山幹太 慎んで申し上げます。

親神様には、一れつ子供の成人をお待ちかね下さる深い親心のまにまに、長の年限、絶え間なきお慈しみと、限らない御守護を賜り、成人の道恙なくお連れ通り下さいます御厚恩の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。

私共は、御恩報じを念頭に、届かぬながらも思召に添わせて頂けるよう、心の向きを正し、日々、持ち場、立場のつとめに励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、当大教会の月次の御祭りを執り行う緑りの日でございますので、只今からおつとめ奉仕者一同心を揃え、一手一つに陽気に勇んで、座りづとめ、てをどりを勤めさせて頂きます。

御前には、青葉の彩り鮮やかな中に、今日を榮しみに帰り集いました道の子達が、日頃賜る御高恩への感謝と、なおも変わらぬ御守護を願い、共におうたを唱和してつとめに勤しむ状をも御覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

なお、本日は、おちばより学生担当委員会委員長 中山昭悦先生のご出向を頂き、祭典に引き続き「学生層育成者講習会」を開催させて頂きます。いま、私共よふばく全てに委ねられた使命は、「道の将来を担う人材の育成」であるとの自覚のもとに、しっかりとおちばの理を頂戴して、時旬の思召にお応えさせて頂きたいと念じております。

更に婦人会では、来年に迎えます「天理教婦人会創立百十周年記念・第百二回総会」に向けて、一人ひとりが婦人会員としての自覚を深め、活動方針を実行し、実のよふばくに育つことを目標に、五月から九月十六日にかけて、「会員決起の集い」が、国の内外を合わせて、三七九会場において開催されますが、この旬にすべての会員の参加を目指したいと存じます。

私共をはじめ、教会長、よふばく・信者一同は、常にひながたを胸に、おちばにしつかりと心をつなぎ、一人ひとりが、いま何をすべきかを考え、その御用を勇み心で精いっぱい担わせて頂く所存でございます。

何卒、至らぬ所は幾重にもお仕込み下さり、互いに立て合ひ、たすけ合ひ、睦び交わす陽気ぐらしの世の状に立て替わりますよう、お導きの程、一同と共に慎んでお願い申し上げます。(原文のまま)

入社祭

立教182年5月の入社祭はありませんでした。

5月22日(水)

【香川県丸亀市】

天候 晴一時薄曇
 最低気温 15.8℃
 最高気温 26.9℃
 平均気圧 1007.0 hPa
 平均湿度 53%
 平均風速 2.7 m/s
 日照時間 11.8 時間
 降水量 0.0 mm

各地の動き

おかえりトーク&演奏会

本島詰所では5月25日午後7時より4階講堂において「おかえりトーク&演奏会」を開催し、約150名が集いました。

守安功氏・雅子さん夫妻(アイルランド古典音楽演奏家)による、アイリッシュフルート、リコーダー、アイリッシュハーブなどを使った演奏が行われ、さらに守安氏の紹介で木戸麻衣子氏(大阪)、花田理絵子氏(鹿児島)も演奏に参加しました。



みかぐらうた第一節を、ア

イルランド風変奏曲にしたものを初披露され、おつとめの拡がりや普遍性を感じさせました。また守安氏の軽妙なトークにも大いに盛り上がり、人のご縁の大切さに共感を覚える演奏会となりました。

赤峰別席団参

赤峰分教会(向所隆文会長、宮崎県都城市)では、5月25・26日に赤峰別席団参を実施。帰参者約330名。

団参の2日間で、初席19名、中席32名が別席を選び、4名がをびや許しを戴きました。

26日の本部月次祭終了後、西礼拝場において全員でお礼づとめを勤めたほか、前夜は詰所で催された「おかえりトーク&演奏会」を楽しみました。

大松峰分教会・上棟式

大松峰分教会(松下一司会長、大分市)では、昨年4月26日のお運びで神殿移転建築



の理のお許しを戴き、神殿ふしんに取りかかっています。工事も順調に進み、去る6月11日午後1時より神殿棟の上棟式を、向所隆文・赤峰分教会長祭主により執り行いました。参拝者約80名。上棟式に続いて、餅まきを行い、笑顔があふれる賑やかな式典となりました。

こかん様に続く会

女子青年委員部(原口いっほ委員長)では、5月3・4日に本島詰所において「立教182年こかん様に続く会」を実施。女子青年22名、婦人会2

名の24名が集いました。

こかん様の足跡をたどり、瓢箪山駅(東大阪市)から十三峠を越えておちばまで徒歩帰参。吉田要子婦人会本島支部女子青年担当より、こかん様のお話。詰所館内清掃ひのきしん、親睦会を行いました。



GW雅楽講習会

青年会本島分会(片山秀明委員長)では、5月4・5日に本島詰所において「ゴールデンウィーク雅楽講習会」を実施。初心者ばかり20名が参加しました。

初日は終日、管別練習を行い、2日目の午前中は管別に続いて合奏練習を行いました。

本陽山分教会・鼓笛練習

本陽山分教会(宮武有為子会長、北九州市小倉北区)では、5月2日に鼓笛隊小倉分隊練習を実施。隊員7名、高校生1名を含む13名が参加しました。

初めに少年会員で座りづとめをつとめた後、規律訓練、パート練習を行い、練習終了後に6日の月次祭準備ひのきしんを行いました。次回は7月14日に実施予定。



事情はいつ

立教182年5月、本島関係のお運びはありませんでした。

おさげの理拝戴

(立教182年4月分)

- ▼栄森峰△富田小百合 ▼栄東峰△川村幸代 ▼實峰△山内智子 ▼吉松峰△吉野はる香 [計4名]

教人資格講習会修了

(立教182年4月修了)

- 本高 菅岡あや [計1名]

をびや許し

(立教182年4月分)

- ▼本日比△石原利安 ▼本通△若竹香奈 [計2名]

おさげお取り次ぎ報告

(立教182年5月22日)

- 報告数 1、444回
- 累計 7、311回
- ※前年同月累計比 833回減

大教会長動向

▼6月(予定)▲

- 3日、香川教区役職者会議
 - 4日、教会長おやさと研修会 委員会
 - 8日、本承德分教会巡教
 - 11日、本清水分教会巡教
 - 12日、本廣分教会巡教
 - 15日、琴浦分教会巡教
 - 18日、本福分教会巡教
 - 22日、大教会月次祭執行
 - 24日、修養科門出まなび
 - 26日、本部月次祭参拜
 - 27日、かなめ会
 - 29日、河原町大教会 創立130周年記念祭参拜
 - 30日、本部神殿奉仕当番
- 以上

レッツゴー青年会“勇み隊”

【青年会本島分会】

青年会本島分会では、新たな活動「レッツゴー青年会“勇み隊”」を企画

●趣旨：教会を賑やかに、喜んで頂ける活動を行う。教会につながる青年会員や地域の会員と、共に楽しくひのきしんをする。

●内容：相談の上、教会の希望に沿った活動を行う(例：草刈り、重い荷物運びなど)。教会に負担をかけないよう、手弁当で行う。教会の方々や青年会員との交流を行う

●派遣希望される教会は、青年会本島分会までご連絡ください。

おてふりお手直し

世話人・宮森与一郎先生によるおてふりのお手直しですが、5月24日午後2時より2時間、本島詰所北棟一階和室で行われ、大教会長夫妻を始め、この日詰所に居た役員、准役員、



直轄教会長やその配偶者など、17名が受講しました。

これは創立120周年記念祭に向かつて「成人目標」に掲げられている「おつとめの勤修」を念頭に、大教会長の呼び掛けで開催されたもので、座りづとめから四下り目まで細かくお手直しを行いました。

宮森先生はおてふりで特に①澄み切ったゆったりした心で素直な手振りを心がけると、②一手一つに合わせることに、③勇んだ心で勤めること、三つのポイントを教示されました。

このお手直しは、今後も宮森先生のご都合に合わせて、続けられることになっています。

ろくぢな

(立教182年5月分)

- ▼本島△片山幹太・片山かおり・香葉子・幹太郎・好次・昇太△藤山さちよ ▼本浜△片山清枝・正枝・誠
- ▼崇徳分教会△高垣みなみ・嘉一
- ご芳志に厚くお礼申し上げます

にをいがけ名簿提出教会 (5月)

本島	0	本攝	6	吉峰	3
本樺	15	本津	6	本豪	45
本谷	20	本泉	3	本倉	3
御幸濱	5	本浦	7	本栄	31
本桶川	5	本山海	3	本雄	38
代々木	10	本備前	4	本森	33
本萬代	2	本府中	4	本東	20
本都	56	本宣道	3	本靈	4
本京	34	本陽山	3	本實	48
本草	24	本千嘉	8	本松	44
本日米	3	本新田	3	本鶴	37
本千代	2	本赤	25	本仙	12
本平濱	3	本雅	2		

計 38 教会 574 名





立教182年子どもおちばがえり

【少年会本部】

- 期間：7月26日より8月4日まで
- テーマ：「ありがとう！ よろこびつなごう おやさとへ」
- 日程計画書の申込み期間は、5月1日より7月17日(必着)です。所定の日程計画書に行事番号・行事名を正確に記入し、少年会本部に持参もしくは郵送にてお申し込みください。(要項参照)
- 少年会本部に提出された日程報告書は、本島詰所にも帰参日程と人数をお知らせ下さい。家族やグループでも必ずご報告下さい。

ガイドブック頒布開始

- ガイドブック1冊50円(税込)
- チラシ1包50枚150円(税込)
- バッジ1個40円(税込)
- 頒布について：5月25日より、少年会本部、または道友社各販売所にてお求め頂けます。
- お問合せ：〒632-0035 天理市守目堂町213-4 おやさとやかた真南棟4階 天理教少年会本部会計課
TEL 0743-63-1954・Fax 0743-63-4625

6月ひのきしん派遣依頼

【総務部】

〈本部食堂ひのきしん〉

- 期間：6月16日～30日
- 派遣教会：本京①

〈大教会・炊事ひのきしん〉

- 期間：6月21日～22日
- 派遣教会：本九②、本邦①

〈詰所・食堂ひのきしん〉

- 期間：6月25日～26日
- 派遣教会：本浜②、本府中①

<https://www.honjima.com/>

本島大教会ウェブサイト

立教182年(第30回) 少年会おつとめ総会と夏のつどい

【少年会本島団】

- 期日：8月4日(日)午後3時受付、5日(月)午後1時頃本部参拝後解散
- 会場：本島詰所4階講堂
- 対象：小学生、中学生、幼児(鳴物、おてふりができる未就学児)
- 参加御供：1人500円(宿泊、食費は別に各自でお納め下さい)
- 日程：4日受付、開会式、リハーサル、お楽しみ会。5日おつとめまなび総会、閉会式、本部参拝
- 携行品：着替え、洗面具、保険証(またはコピー)
- おつとめ役割に当たっている人は下記の小物をご用意下さい。
男子：白Vネックシャツ、ステテコ(汗取り)、足袋(タビックス可)
女子：白Vネックシャツ、裾よけになるもの(汗取り)、足袋(タビックス可)
琴の役割者は各自自分に合う爪をご持参下さい。
※持ち物には必ず名前を記入して下さい。
※詰所での宿泊、食事、入浴は各教会毎にお世話取りをお願いします。また宿泊、食事の予約も各自でお願いいたします。

●おつとめ総会地区役割

- 座りづとめ：各教会地区代表者(担当：茶屋原良昭)
- よろづよ八首から三下り目：本京分教会、四国地区、山陰地区(担当：牧野近弘、倉嶋孝明、高垣洋子)
- 四下り目から六下り目：赤峰分教会、九州地区(担当：大矢万三、宮武有為子)
- 七下り目から九下り目：本攝分教会、阪神地区(担当：片山直明、柴田久生)
- 十下り目から十二下り目：渋谷分教会、本浜分教会、北海道地区、東海地区、中国地区、海外(担当：後藤正樹、大上道徳、茶屋原良昭、岩橋元博)

鼓笛隊夏季合宿

【少年会本島団】

本島団鼓笛隊 第108回夏季合宿

- 期間：7月26日(金)～8月5日(月)
- 会場：本島大教会、本島詰所
- おちばでの予定：8月2日(金)おやさとパレード出演、3日(土)鼓笛隊御供演奏、後夜祭(詰所4階講堂)

学生生徒修養会高校の部

【本部学生担当委員会】

- 期間：8月9日より8月15日まで
8月9日午前9時までに詰所に集合。
8月15日正午ごろ詰所にて解散。
- 受講対象：高等学校に在学し、全期間受講できる者(親里管内の高校生は天理高等学校第1部の自宅通学生に限り受講可)
- 受講御供：1万円(受講御供1万円のうち、半額を大教会ろくち会より助成いただきますので、5千円を詰所に納めて下さい)
- 受付期間：5月25日より7月25日(必着)
- 申込方法：受講願書1通(大教会長の捺印が必要)、返信用封筒1枚(保護者氏名、住所、郵便番号を記入し、82円切手を貼付してください)
- 詳細については本島学生担当委員会(池田さわみ)まで。



衣料バザー品の受付中止

【婦人会本島支部】

衣料バザーは在庫整理のため、立教183年4月まで、受付を一時中止いたします。

統計(4月1日～30日)

教会名	初席	中席	妻の座	修養料	教人講習	検定講習
御幸濱	1					
本備前		1				
本高					1	
本小倉		1				
吉峰		1				
豪峰	1	1				
栄森峰			1			
栄東峰			1			
實峰			1			
吉松峰			1			
鶴峰		1				
都峰	3					
エヌ・シー	2					
合計	7	5	4	0	1	0